

2023年7月23日

年間第16主日

菊地功大司教 メッセージ

マタイ福音は、創造主である神が、良い麦も後で蒔かれた毒麦も、共に育つことを容認するけれども、最終的には刈り入れの時に二つを峻別すると語るイエスのことばが記されていました。このたとえでの刈り入れの時とは、一般的に世の終わりの最後の審判の時であります。

わたしたちが生きているいまの世界は、まさしく神が創造された良い麦と、人間の欲望が生み出した悪い麦が、混じり合って共に育っているような状況です。暴力が支配し賜物であるいのちが危機に直面するような現実を目の当たりにするとき、神が悪の存在を容認しているのかと考えてしまいますが。福音は、それは刈り入れの時まで待つておられるのだとして、峻別できるそのときを待つておられるのだと記します。すなわち創造主である御父は、悪がこの世界を支配するような状況を容認しているわけではないことを心に留め、毒麦を凌駕するほどに良い麦が世界を支配するように、わたしたちはただ傍観するのではなく、良い麦をさらに広く蒔き続ける努力をしなければなりません。わたしたちに与えられている使命は、畑に入って毒麦を抜きとることではなく、良い麦をさらに広く蒔き続けることに他なりません。

教会は7月の第四日曜日を、祖父母と高齢者のための世界祈願日と定めています。日本では来年以降は、聖座の許可を受けて、敬老の日のある9月にこの祈願日を行行することを決めています、今年はまだ7月に行われます。

少子高齢化が多くで激しく進み、伝統的な家庭のあり方が崩壊する中で、かつては知恵に満ちた長老として社会の中に重要な立場を持っていた高齢者が、周辺部に追いやられ、忘れ去られていく状況が出現しました。高齢者にはそれまでに豊かに蓄えた知識を持って、次の世代につなげる大切な努めがあることを教皇は強調し、若い世代と高齢の世代の交わりを勧めておられます。

今年のメッセージで教皇は、今年の夏に開催されるワールド・ユースデーに近いことから、若い世代と高齢の世代の交わりに重要性を強調され、こう述べています。

「主は若者に、年を重ねた人たちとかかわることで彼らの記憶を大事に守りなさいとの呼びかけを受け入れるよう、そして高齢者のおかげで自分は大きな歴史の流れに属する恵みを与えられているということに気づくよう期待しておられます」

その上で教皇は、「即座ということばかりに、つまり直ちにながほり頂戴しよう、「すべてを今すぐに」ということばかりに神経を使う人は、神の働きが見えなくなってしまう。それに対して神の愛の計画は、過去、現在、未来を貫き、各世代へと及んで、それらを結び合わせます。それはわたしたちを超越した計画ですが、そこにおいてはわたしたち一人ひとりが重要であり、何よりも自分を超えていくことが求められます」と述べて、互いの存在に目を向け、すべての人を福音宣教に招かれる主の呼びかけとともに耳を傾け、支え合いながら、ともに歩み続けるようにと招いておられます。